実践英語教育

授業評価の検討とこれからの展望

英語教育分科会座長
都市教養学部人文・社会系教授
三宅　昭良

【はじめに】

例年、本学の英語教育は4月最初にクラス編成テストを行い、A,B,Cの3段階にレベル別のクラス編成を行っている。そのほうが学生の疑問の内容と性質、躓きの原因、重点的に教えるべきポイントなどが似通っていて、効率の良い授業ができるはずだというのがその主たる理由である。

しかし今年は東日本大震災後の計画停電による列車の運休とダイヤの乱れ等を危惧し、クラス編成テストを中止した。したがって今年度の1年生は習熟度別のクラス編成にはなっていない。また同様の理由で前期の統一試験も行わず、日本人教員が教える実践英語Iaは個別試験、NSE教員によるIc、IIcは平素のクラス参加とプレゼンテーションなどの評価で成績を判定した。

そうしたなか、これはアンケート調査にあらわれてはいないが、クラスによってはかえっていい雰囲気が醸し出され、とても教えやすいという教員がいる一方で、例年と違い、クラス内の学生の力に差がありすぎて、どこに照準を合わせればいいのか困ったという教員もいた。学生の自由記述にも、そこに起因するとみられる不満が散見された。

とはいうものの、以下に検討する「実践英語Iaの授業評価アンケート」の質問項目は、個々の学生と今年の教材と担当教員との関係の集積データである。クラス編成の如何に関わりなく、2011年度の集計結果を経年変化の中でとらえ評価することが可能であるとみていいだろう。

我々が「実践英語」のシステムを組んでから7年目である。教員は学生の学習意欲と能力の向上を目指して努力してきたはずであるが、それがどう結果に結びついているか、また学生に評価されているか、細目を見ていくとする。

【個別質問事項について】

問9は共通教科書の「難易度」を問うものである。今年度使用したMosaic 1は、世界の多様な価値観や生活習慣、最新の話題から歴史や芸術、そして少しだけ短編小説も含まれていて、内容の点でも文体の点でも多彩であったが、セクションによって文章の難易度に幾分の差がみられた。

これに対し60.9％の学生が「ちょうどよい」と答えている。そして「やや難しい」、「難しい」と感じた学生22.4％、「やや易しい」、「易しい」と感じた学生が16.6％であった。一般的には十分よい数字といえるかもしれない。

関心項目を尋ねる問10に対する回答は、昨年同様、「内容理解」をあげるものが多く、「英文和訳」、「構文理解」、「語彙の学習」とつづく。

「実践英語I」の基本趣旨は第一に英文を読んで内容を正確に把握する能力の養成にあるのだから、このような結果はおおむね妥当なものだといってよいだろう。

問11は「この授業は、今後のあなたの英語学習に資するところがあった」かどうか、その程度を問うものであるが、「強くそう思う」、「そう思う」を合わせると49.3%で、ほぼ半数の学生が授業を受けたことに意義を感じている。平均値も昨年より0.13、2007年の3.10からなら0.31伸びている。教員との意識の開きは依然大きく見えるが、クラスを全体的に評価する教員のほうが数字が高くなるのは、ある意味で当然のことである。

【共通の質問項目について】

問1の授業に対する「学生の意欲的取組」に関する質問は、平均値3.55と去年とほぼ同じ数字であった。教員から見た評価も3.80で、昨年とほとんど変わらない。開学当初に比べて学生の受講態度は良くなっているといえようか。

問2「授業の目的を意識しながら学習することができた」に対し、52.4％の学生が「強くそう思う」または「そう思う」と回答した。平均値の経年変化を見ても過去最高の昨年をわずかだが上回っている。学生の目的意識は向上しているといえよう。

問3「教員の説明は分かりやすかった。」学生の回答は昨年とほぼ同様である。教員のポイントは少し下がっている。これは習熟度別のクラス分けを取れな

かったことが影響しているのかもしれない。学生との差は昨年同様、やはり大きい。これを埋める工夫が必要である。

問4「教員は学生の質問・意見に対して適切に対応していた。」平均値は3.81。昨年の3.84に対して少し下がっている。教員の気持ちは少し上がっている。つまり差が開いているわけだが、悪い数字ではない。

問6「成績評価方法について十分な説明があった。」平均値は3.67。去年より若干下がっている。教員はむしろ昨年より上がっている。当初の出欠のカウントに関する配慮、統一試験の中止などが影響したのかもしれない。

問7「シラバスに目標として掲げられている知識や能力を獲得できた。」平均値の経年変化は少しずつだが毎年伸びており、今年は3.26であった。しかし「強くそう思う」と「そう思う」学生が36.3%という数字は他の項目に比べて随分と低い。教員の側も低く、なおかつ昨年より下がっている。昨年の座長は目標そのものの変更を示唆していたが、筆者は後述するとおり、別の工夫をすべきと考える。

問8「私はこの授業を受けて満足した。」平均値は昨年と同じ3.47。約半数の学生が「強くそう思う」または「そう思う」と回答した。経年変化は改善を示してきたが、さらに多くの学生の満足を得られるように、教員の努力と工夫が必要である。

問5について触れなかったが、忘れているわけではない。それは「今後の課題」に深くかかわるからである。

【今後の課題と展望】

ここまで各設問について検討し、数字の意味を読み、評価をしてきたが、それらはある意味で相対的でしかないかもしれない。というのも、問5にこそ最も改善の余地がみられ、それ如何で他の項目の数字は大きく変化する可能性を秘めているからである。

すなわち、授業外における1週間の英語の学習時間を問う設問に対し、84%の学生が「1時間程度」以下でしかないと回答している。また教員も75.6%がその程度の学習時間しか課していないことを自覚している。これは「1週間の学習時間」である。ここには大いに改善の余地があるといわねばならない。端的に言えば、もっと宿題を課し、自宅学習を促し、それを成績に反映させるべきである。

いうまでもなく、クラスは教員と学生が協働して作り上げるものである。両者の深い反省と再起が必要であると痛感している。

ただ、学生に負荷がかかりすぎては、かえって学習意欲を失わせてしまう。この点の兼ね合いと学習意欲誘導の工夫が肝要である。また、多くの学生を鼓舞することに成功しても、一部の学生を置き去りにしては良い教育とはいえない。その点からもやはり習熟度別クラス編成は重要だと考える。

また、現行のような多彩で豊かな内容の教科書を使用することは学生の目を世界に開くうえでも学習意欲を保持するうえでも有効な要素の一つである。しかし、大半の学生が共通教科書の難易度を「ちょうどいい」と評価するいっぽうで、難しすぎると感じる学生と易しすぎると感じる学生がいることもまた事実である。これはよりきめ細かいクラス分けと教科書の選定を示唆しているととらえられる。

我々は現在、平成25年度に向けて英語教育のシステムを改善すべく議論を重ねている途上である。そこではすでにここに記した反省に立ち、改善を盛り込んだ案が練り上げられつつある。新しいシステムによって、世界の多様な価値観を理解し尊重できる、そしてそのなかで自己の価値観を語ることのできる、その基礎となる英語力を一人でも多くの学生が身に着けられるように、われわれ教員の一人一人は努力を積み重ねていく。